

奈良美智

《Harmless Kitty》



奈良美智 (1959-)
《Harmless Kitty》

1994年
アクリリック・綿布
150.0 × 140.0cm
平成25年度購入

© NARA Yoshitomo

奈

良がドイツのケルンにアトリエを構えていた頃の作品です。猫の着ぐるみを着た——と、とりあえずは言っておきます——子どもが、おまるに座ってこちらを見えています。いや、視線はちよつとだけ上の方向にずれているようにでしょうか。

タイトルのうちHarmlessは「悪意や罪のない」とか「いたいけな」を意味し、Kittyの方は「子猫ちゃん」を意味します。この作品の裏面には奈良自身による書き込みがあつて、そこからタイトルが「Harmless Kitty Boy」「Don't mind Kitty Boy」「Harmless Kitty」と変わつていったことがわかります。最終的に「Boy」がなくなっているのがポイントです。

実は、この頃の奈良の作品には、おかつぱ頭でスカートをはいた子どもがしばしば登場するのですが、そのことについて彼はこう話しています。「それはたぶん、バランスの問題じゃないかな。髪型でいろんなヴァリエーションができるじゃない。でも、僕はこれを女の子だと思って描いてるわけじゃない。中性だと思って描いている。というか、子どもと思って描いてる」(『美術手帖』一九九八年四月号、一三二頁)。

この作品では、着ぐるみのおかげで髪型を描く必要性がなくなっています。つまり、中性的な存在であることを強調することができているのです。しかも、同時に、

まなざしをより際立たせることにも成功しています。ただ、着ぐるみやおまるというのがいささか非日常的ではありますが。少なくとも、大人にとっては。

いや、ひよつとしたら、これは着ぐるみなどではないのかもしれない。そう思つて見れば、おまるに座っているのに何も脱いでないことの合点がいきます(もちろん、ただ座っているだけという可能性もあります)。つまり、想像力をたくましくすれば、ここに描かれているのは、人間の子どもでもなければ動物でもない、あるいは人間の子どもでもあり動物でもある、そんな特別な存在なのではないかと考えることもできるのです。

どちらにしても、そうした存在を現実の世の中に見ることはできません。多分できません。でも、そうした存在を考えることはできます。もつと言えば、そうした存在を考えることは、人間が生きていく際に、重要なことであり続けてきました。かつて、天使や菩薩といった存在が生まれたように。実際、八〇年代の奈良は、天使的なモチーフを描いています。

この作品は四月六日まで「MOMATコレクション」展に展示されます。しかも、収蔵を祝つて、Harmlessな子どもを描いた日本近代美術史上の代表作、岸田劉生の《麗子五歳之像》(一九一八)と並べますので、どうぞお見逃しなく。

(美術課主任研究員 保坂健二郎)